

□ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

興味深いことには、方々でめぐり会った品物は、それがどんなに美しい場合でも、一つとして作った人の名を記したものはありません。時として何地名産とか、「何々堂」製などと貼り紙のついている場合もありますが、個人の名はどこにも記してありません。

ところが近世の「美術品」と呼ばれているものを見ますと、どれにも皆銘が書き入れています。銘というのは作り手の名であり、たとえばどんなつまらない作品にも、何某の作ということが記してあります。

ここに面白い対比が見られます。一方は名など記す気持ちがなく、一方は名を書くの忘れたことがありません。なぜこんな相違が起こるのであるのでしょうか。要するに一方は職人が作るものであり、一方は美術家が生むものだからであるといわれます。前者は多くの人たちの作り得るものであり、後者はある個人だけが作り得る作品だからであります。しかしこのことは、とかく前者を卑しめ、後者をのみ尊ぶ風習を醸しました。なぜなら職人の作ったものは平凡であり、美術家の作るものは非凡であると思われるからであります。どんな品物も銘がない場合に、その市価が落ちるのは常に見られる現象であります。ですが、^① こういう見方ははたして当を得たものでありましょうか。

※ 私たちは無名の職人だからといって軽んじてはなりません。大勢の工人たちが作り得るものだからといって、蔑んではなりません。なぜならたとえ彼らが貧しい人々であり、作るものが普通のものであるとしても、大きな伝統の力に支えられていることを見逃すわけにゆきません。彼ら自身は小さくとも、伝統は大きな力があります。それが彼らに仕事をさせているのであります。のみならず彼らの多くは辛抱強く年俸奉公を経て、腕を磨いてきた工人たちであります。その腕前には並ならぬ修行が控えています。どんなに平凡に見えても、誰にでもすぐ出来る技ではありません。それに仕事をおろそかにしないのは、職人の気質でさえありました。

それゆえ彼らにも仕事への誇りがあるのであります。ですが自分の名を誇ろうとするのではなく、^② 正しい品物を作るそのことに、もっと誇りがあるのであります。

のと評されて来ました。なぜなら実用品は純粋に美を現したのではなく、用途に縛られたものに過ぎぬと考えられるからであります。その結果美はかえって生活から離れた世界にこそあるものだと思はれるに至りました。

しかし生活の中に深く美をまじえることこそ大切ではないでしょうか。さらにまた生活にまじわることによって、かえって美が深まる場合がないでしょうか。むしろこのような時に、美しさが確実なものになりはしないでしょうか。はたして生活から離れた時に、美が高まってくるのでしょうか。日々の生活こそはすべてのものの中心なのであります。またそこに文化の根元が潜みます。人間の真価は、その日常の暮らしの中に、最も正直に示されるのであります。もしも我々の生活が醜いもので囲まれているなら、その暮らしは程度の低いものに落ちてしまっておりましょう。いつか心はすさみ、荒々しい、^③ 潤いのないものに陥つてしまっておりましょう。一国の文化はその国民の日々の生活に最もよく反映されます。生活を深いものにするために、どうしてもそれは美しさと結ばねばなりません。さて生活と美しさとを結ばせる仲立は、実に用途のために作られる器物であります。それゆえ日々用いる器物がどんなに美の世界で大切な位置を占めるかが分かるのであります。これが醜かったら生活に親しさと温かみはなくなるのであります。たとえ当たり前な平凡なものに思われても、人間の生活に大きな役割をもっていることが分かります。

(柳宗悦の文章による)

問1 傍線部①「こういう見方」とありますが、それはどのような物の見方ですか。

二十五字以内で簡潔に答えなさい。

問2 傍線部②「正しい品物」とはどのような品物ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 寸法の確かさにこだわった品物。
- イ 色や形が個性的に作られた品物。
- ウ 使いやすく実用性に富んだ品物。
- エ 年月が経てば市価が上がる品物。

ます。いわば品物が主で自分は従なのであります。それゆえいちいち名を記そうとは^④ クワダてません。こういう気持ちこそはもつと尊んでよいことではないでしょうか。実に多くの職人たちは、その名を留めずにこの世を去ってゆきます。しかし彼らが親切にこしらえた品物の中に、彼らがこの世に生きていた意味が宿ります。彼らは品物で勝負をしているのであります。物で残ろうとするので、名で残ろうとするではありません。

彼らの多くは教育も乏しく、識見もたない人たちでありましょう。しかし正直な人であり信仰の人であることは出来たのであります。自分独りでは力が乏しかったとしても、祖先の経験や知恵に助けられて、力ある仕事を成し得たのであります。伝統への従順さは彼らの仕事を確実なものにしました。彼らがもし自分の力にのみ頼って歩いたら、きつと踏みはずしたりつまずいたりしたでありましょう。荒波を一人でこいで横切ることは、難しいからであります。ですが他力に任せるとき、^⑤ ちようど帆いっぱいに風をはらんで滑らかに走る船のように安全に港に入ることが出来たのであります。私たちは自力の道のみが道でないことを知ります。工人たちはわが名において仕事をする美術家たちではありませんでした。しかしわが名を捨ててかかる彼らの道にも、驚くべき仕事保障されていることを知らねばなりません。この世では貧しい職人たちも、美の国では高い位を得ている場合が、決して少なくないでありましょう。

この世の人たちは、名を記す必要のない品物の値打ちを、もつと認めねばなりません。そうして自分の名を誇らないような気持ちで仕事をする人たちのことを、もつと讃えねばなりません。そこには^⑥ 邪念が近づかないでしょう。ですから無心なものの深さに交じり得たのであります。この世の美しさは無名な工人たちに負っていることが、いかに大きいでありましょう。

さてこのような工人たちが作る品物は、どんな性質をもつのでしょうか。何より著しい点は、どれも実用を旨として作られているということでありま。用いられるために作るのだから眺めたり楽しんだりするためのものではありません。ここでも実用的な工芸品と、鑑賞的な美術品とは、性質が大変違うのを見られるでしょう。鑑賞というのはその美を眺め味わうことであります。用いる工芸と眺める美術と、この区別があるため、とかく後者は前者よりも高尚(注・程度が高く上品なこと)なものとされました。そうして^⑦ 実用にまじわる品物のごときは、位の低いも

問3 次の文章は傍線部③「ちようど帆いっぱいに」港に入ることが出来た」から読み取れることを説明したものです。空欄A～Cに入る適切な表現を指定の字数で本文中からそれぞれ抜き出し、答えなさい。ただし、Cに入る表現は、※の段落から抜き出すこと。

「船」とは「A(二字)」を表し、「帆いっぱいに」風をはらんで滑らかに走る」とは、「A」にとつて、「B(八字)」が、仕事をする上での大きな支えとなつていてことを表しています。「B」、つまり「C(七字)」が、自分ひとりでは成し得ない仕事を確実なものにしているのです。

問4 傍線部④「邪念」とは、ここではどのような思いのことですか。「思い」につながるように傍線部④以前の本文中から十一字で抜き出し、答えなさい。

問5 傍線部⑤「実用にまじわる品物のごときは、位の低いものと評されて来ました」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 実用品は限りある費用の中で作られているので、どんなに上質な品物を目指しても限界があり、最高の美に到達するのは困難だと考えられたから。
- イ 実用品は単に古くからの決まった方法に従って作られているだけなので、どんなに丁寧に作られたものであっても、現代的な美しさは見出せないと考えられたから。
- ウ 実用品は教養の乏しい職人たちによって作られているので、どんなに質の良い品物であっても、高い芸術的価値は認められないと考えられたから。
- エ 実用品はあくまで日常生活の中で使われる品物として作られているので、どんなに丹精込めて作られたものであっても、美を追求した結果ではないと考えられたから。

問6 次の文章は本文の内容を説明したものです。次の空欄X・Yに入る適切な語を、Xは自分で考え、Yは本文中から抜き出し、それぞれ漢字で答えなさい。また、空欄①～③に入る適切な語を語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。

「実用品」は、職人が一つ一つ心を込めて生み出したものである。それは多くの無名の職人によって作られるとは言っても、機械で大量生産されたような「醜いもの」とは全く異なり、「X」仕事ならではのぬくもりや、ものづくりにかける職人の「①」に満ちている。

そうした「実用品」は、日々の暮らしの中で長く使い続けられることによつて、「②」を増してゆく。そして、私たちの「③」に働きかけ、心を豊かにしてくれるのである。そのようにして育まれた「③」は、生活、さらには「Y」を築く土台となるのである。

【語群】 ア 知性 イ 根性 ウ 自負 エ 趣き
オ 素朴さ カ 立派さ キ 感性 ク 独創

問7 太線部Aのカタカナを漢字に直し、B～Dの漢字の読みを平仮名で答えなさい。

藤崎さんはこの春に小坂町に引っ越してきた転校生だった。

風美の通う小坂小学校は全校生徒数が二百名足らずの小規模校で、クラスは一学年に二クラスだ。クラス替えがないために、都会のマンモス校からは想像もできないほど級友同士の結束が固く、よそ者には入り込みにくい。

そんなクラスに、藤崎さんは転校から二、三日で、あっさり溶け込んだ。美人なのに、よく気がついて優しいうえに、物知りで話が面白い。誰もが好きになり、あこがれずにはいられないタイプだったからだ。

ただ一人、いつまでも悪口を言っていたのは優子だった。自分の仕切るグループの女の子に「優しそに見えても、ほんとには私たちのこと、田舎もんって馬鹿にしてるんだからね」と藤崎さんに近寄ることを禁じた。

そういうわけで、優子のグループに入っている風美もしばらくは藤崎さんと親しく口をきくチャンスをつかめずにいた。仲良くなれたのは、同じ園芸飼育委員になって、餌当番のペアを組んでからだ。

何事にも手際のいい藤崎さんは、ウサギへ餌をやるのも小屋の掃除もあつというまにすませてしまい、風美の出る幕はほとんどなかった。家族そろつての動物好きで、鳥やウサギの世話慣れているのだという。

当番の後、始業まで時間があまると、ほかに誰もいない朝の教室で、風美は藤崎さんとおしゃべりした。そして、下校時間が委員会ごとにばらばらになる火曜日には、^①優子の目を盗んで藤崎さんの家へ遊びに行った。

藤崎さんの家はまるで動物園だった。

家のいたるところにインコや手乗り文鳥の籠が吊され、応接間のソファにはシャム猫が寝そべり、藤崎さんの部屋では手のひらサイズのミニウサギがはねていた。

「よく猫に食べられないね」

「子供のときから一緒にいるから、家族だと思ってるんじゃないかな」

「すごいね。うらやましいなあ」

「風美ちゃんには弟がいるんでしょ。わたしは、そっちの方がうらやましいな」

「兄弟なんか、いない方がいいよ」

抱かせてもらったミニウサギがあまりに可愛くて、風美は自分もウサギを飼いたいとお父さんに頼んでみた。

お父さんは「お母さんとおばあさんがいいと言ったら飼ってやる」と言ってく

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

日はすっかり落ちて、提灯の明かりの外は薄闇に包まれていた。畦道や畑の土手では夏草が伸び放題に伸びて青い匂いをさせていた。その草むらのところどころで、螢がぼうつと光っている。風美が歩くたびに、足元から光が舞い上がり、点滅を繰り返しながら、腰の高さまで育った稲の上を飛んでいった。

公民館の方からは、笛と太鼓の祭囃子が聞こえてきていた。

その音に引き寄せられるかのように、北から東から、鉄道高架をくぐり、田圃を越えて、国道に人が集まっている。揺れ動く提灯や懐中電灯の光は、まるで大きな螢が飛んでいるかのようなうだ。

風美は手元の提灯を見下ろした。

国道から眺めたら、この提灯も同じように見えるのだろうか。

さしものダンプ街道も、七時前のこの時間帯には通行量が少なくなる。数で劣る通行車両はひっきりなしの横断者に脅かされて徐行せられ、矢幡町の国道は時ならぬ歩行者天国となっていた。

スムーズに国道を渡り終えて、風美は河上家のポーチに立った。

ドアベルを鳴らすのがためらわれるのは去年の苦い経験があるからだ。

昨年のおてんの祭り(注・厄払いの祭り)、風美は約束の六時半より十五分も早く、優子の家へ出向いた。

ところが、優子は風美との約束を忘れていて、すでにお姉さんとお参りをすませたという。それも優子本人が玄関まで出てきて説明したのではなかった。テレビに夢中の優子に代わって、河上のおばさんが「ごめんなさいね」と謝りながら、伝えてくれたのだった。

もう絶交だ。二度と口きいてやんない。

固く心に誓ったものの、翌朝、いつもの登校時間には、河上家のドアベルを鳴らしてしまつたのだから、長年の習性というの恐ろしい。

それでも、完全に水に流されたわけではなかった。

先日、藤崎さんに「矢幡町のおてんの祭りへ行ってみたいんだけど」と持ちかけられて、風美が優子に何の相談もせずに「行こう行こう」と即答したのは、去年の仕打ちを根にもつていたからだ。

れたが、お母さんには「昌樹の気管支によくないし、それに動物は死ぬからいや」と反対され、おばあちゃんといえは「今どきはウサギの肉なん売れへんぞ」と、とんちんかんな理由から相手にもしてくれなかった。「売るんじゃないよ。飼うんだよ」と精一杯の反論を試みたものの、「金にもならん畜生に食わせる無駄飯はありやあせん」と言い切られておしまいだった。

ミニウサギを飼えたら、藤崎さんともっと仲良くなれるかもしれない。そんな望みを断られた後だっただけに、藤崎さんから「お祭りへ行くついでに、風美ちゃんの家に遊びに行ってもいいかな」と尋ねられた時は嬉しかった。

優子の反応が心配になりはしたもの、^②去年の仕打ちを思えば、今年はわたしが藤崎さんと約束したつてかまやしないと、風美には珍しく強気な気分だったのだ。

ドアベルを鳴らしてみると、ドアから河上のおばさんが顔をのぞかせた。去年と同様「ごめんなさいね」と謝られるかと思いきや、河上のおばさんは怪訝そうな顔をした。

「優子なら、国道で風美ちゃんを待ってるって、さつき、出てったけど？ 会わなかった？」

優子がおとなしく国道で待っていてくれたなら、すれちがうはずがない。優子の性格からして、風美を待ちきれず、先に公民館へ向かったのだろう。

《中略》

優子は公民館の車寄せの柱にもたれていた。

紺地に朝顔柄の浴衣に臙脂の帯を締めて、中学生といっても通るほど大人っぽ

い。風美は急に自分の浴衣が恥ずかしくなった。白地に団扇の柄に黄色の絞り兵児帯はなんだか子供じみているし、サイズが合っていない。袖は手首に届かず、裾からは脛がのぞいている。

こんなことならお母さんの言うことを素直に聞いておくんだったと後悔したすぐ後で、^③風美の胸はさらに波立った。優子の隣に、白い服を着た女の子が自転車のハンドルに手をおいて立っていることに気がついたからだ。

女の子は優子と顔を見合せて、親しげに笑っていた。

「あ、来た来た。おーい、遅いぞ」

優子に急かされて、風美は足を早めた。

もう間違いない。

自転車の女の子は藤崎さんだった。ニットのサマードレスに、いつもは三つ編みにしている長い髪をリボンでポニーテールにまとめて、耳には貝殻のイヤリングをつけ、こちらも大人びた装いだ。

優子には公民館へ行くまでの間に、藤崎さんが来ることをうちあけておこうと思っていた。その心づもりが外されて、優子にも藤崎さんにも何と言って話しかけたらいいのか、風美はとっさに思いつかなかった。

「あ、風美、怒ってる？ ごめん、ごめん。あんたを待ってたさ、梨佳ちゃん
が自転車を通りかかったのよ。どこ行くのって訊いたら、おてんの祭りに来たって言うんだもん。それなら、行きすぎでしょ。どうせ、わたしも行くついでだから案内してあげるって言ったとたんに、あんたのこと、忘れちゃって。まあでも、どうせ、すぐにこっちへ来ると思ったから。実際、そのとおりになったでしょ」
優子は、風美があらかじめ藤崎さんと約束していたことなど何も知らないようだった。

藤崎さんといえば、汗ばんだ額をハンカチで押さえながら微笑んでいる。偶然会ったという優子の思いこみに話を合わせてくれたのだらう。ここは変に弁解するより、優子のペースに巻き込まれてしまったほうがよさそうだ。
「藤崎さん、小坂町からここまで迷わなかった？」
「へいきへいき。国道沿いにまっすぐ来るだけだもん。こんなに簡単なら、もっと早く来てみればよかった」
「一人で怖くなかった？」
「怖い？ どうして？」
「だって、けっこう暗くなってるし」
「大丈夫。車から目立つように白い服を着てきたから」
「梨佳ちゃん、そうじゃないって。風美はまだお化けが怖いんだよ」
b 図星を指されて風美が黙った隙に、優子は会話の主導権を奪い返した。
「それにしても、このドレス、ほんとに素敵だね。どこで買ったの？」
「お母さんにつくってもらったの」
「いいな、いいな。うちのお母さんなんか編み物なんて絶対してくれないよ。時間かかるし、買ったほうが安いからって。欲しいなら自分でやればって言われておしまい。だけど、手編みって、よっぽどうまくないと、こんなに綺麗に目を揃

えられないんだよね。うわ、自転車なのに、ヒール高いじゃん。よく乗ってこれたね。ちよっと歩いてみて」
藤崎さんは優子の希望にこたえて、ファッションショーのモデルのように右へ左へと歩いてみせた。

④ 仲良しげな二人の様子に、風美は、ほっとしながらも面白くない気分を味わった。

優子ってば、藤崎さんのこと、嫌っていたんじゃないの？

藤崎さんも藤崎さんだ。

A

「わたしたちも、そろそろ、お参りしてこない？」

藤崎さんの提案で、風美たち三人は、花火に興じている低学年の男の子たちの脇を通って社へむかった。

この日は特別に、参道入り口の石灯籠にも火がともされていた。

〔中略〕

社の左右にはそれぞれ大きな提灯が吊されていた。まんなか「牛頭天王」の文字が記されている。牛の頭の王だなんて、神さまっていうよりは、怖いテレビに出てくる化け物みたいだなあと思いながら、風美は先にお参りした優子と交替して、格子の扉越しに賽銭箱へ五円玉を投げ入れた。鈴の緒を振り回し、手を叩いて頭を下げる。

⑤ やれやれ、これで一仕事すんだ。

あとは公民館の入口でお菓子をもらうだけだ。

〔中略〕 ※ここで、風美たちは参拝客のおじいさんに、おてんの祭りの由来について聞く。〕

「ねえ、これって何かなあ」

桜並木の陰から藤崎さんが手招きしていた。

暗がりになっていて分かりにくいのが、桜の根元には幾つか石がおかれていた。なかには名前がたぐさん書き連ねられた石板もある。社を改築した時の寄進者の名前らしい。仏像の光背に似た形をした石には「戦没者鎮魂の碑」と刻まれていた。

藤崎さんはしゃがみこんで、三つ四つ並んだ石塔を見ていた。寄進者記念碑や鎮魂碑のように立派なものではなく、風美たちにも持てるくらいの小さな石を三つ積んだだけの粗末なものだ。

「お墓じゃないの」

② 「覗いてみようか」

優子は井戸へ走り出そうとする。

⑧ 駄目だよ

風美は自分の大声に驚いた。

「どうして」

「井戸には近づいちゃいけないって言われたから」

「誰に」

「おばあちゃんに」

嘘じゃない。嘘じゃないと思う。

だって、もしも、おばあちゃんがここにいたら、絶対に同じことを言うはずだから。

〔中略〕

藤崎さんは熱心に井戸を眺めていた。

優子の提案に気をそられているのは明らかだ。

「風美、ぼうつとしてないで手伝ってよ。あ、梨佳ちゃんはそこで見ていればいいからね。ドレスが汚れちゃうと困るでしょ」

優子は早くも大きな丸石に手をかけていた。

風美は仕方なく提灯を桜の枝に掛けて、優子に手を貸した。

湿った丸石は持ち上げるには重すぎて、取り除くには二人で力を合わせて同じ方向へ押すしかなかった。

思ったよりも大きな音をたてて、重しの石は井戸の蓋から転がり落ちた。参拝客に気づかれたのではないかと心配になるほどだったが、さいい、社殿に人影はなかった。

優子が井戸のうえに自分の提灯をかけた。

ぼんやりと柔らかな明かりが木製の丸蓋に貼りついた枯れ葉を照らした。蓋の中央からは長いものがぐにやりと垂れ下がっている。

「あ、蛇だ」

風美は逃げだしかけたが、藤崎さんは落ちついたものだった。

「風美ちゃん、これは蛇じゃないよ」

死んだ蛇のようなものを蓋から引きはがして検分する。

「かなり腐っちゃってるけど、これって注連縄じゃないかな」

優子があっさり言った。

「さっきのじいじが悪い病気がはやったことがあるって言ってたじゃん。そんなに死んだ人をまつてあるんじゃないの」

「じゃあ、この下に死んだ人の骨が埋まつてること？」

藤崎さんまでが恐ろしいことを平気で口にした。

「やめて、やめて、やめてってば」

泣きそうになった風美に、藤崎さんは「ごめんね」と謝ってくれたが、優子の方は「風美はすぐ本気になるから、からかい甲斐があるんだよねえ」とせせら笑った。

「わたしのこと、からかったの？」

風美が拳をふりあげると、優子はキャハハと笑って逃げた。

「風美ちゃんたちって、ほんとに仲がいいよね」

「仲？ よくない、よくない。腐れ縁って呼んでよ。出来の悪い幼なじみの面倒みるのって大変なんだから。こんなのでよかったら、いつでも梨佳ちゃんにあげるよ」

⑥ だったら、もらっちゃおっかな

たとえ冗談でも藤崎さんにそう言ってもらえて、風美は飛び上がりたほど嬉しかった。藤崎さんは勉強もできるし、スポーツも得意で、男子にも女子にも好かれていた。その藤崎さんと、優子の公認のうえで仲良しになれるのなら願ってもないことだ。

⑦ だが、優子は、わざとのように話をそらした。

「ねえ、あんなところに井戸なんかあったっけ」

その井戸は公民館付属の炊事場と茶話室の間にあった。

丸い石組みに木の蓋がかぶさり、そのうえに漬物石より大きな石が載せてある。

風美はいやな気分になった。

桜の木陰になっているせいか、暗くてじめじめした陰気そうな井戸だ。こういう井戸には、落ちて死んだ子の骨とか、殺された人の死体が入っていたりするんじゃないだろうか。

「まだ水があるのかな」

藤崎さんが呟いた。

注連縄^{ゆづなづな}って、疫病神^{やまびこがみ}や悪霊^{あくれい}を封じ込めた場所に掛けておくものじゃなかったわけ？

ということは、この井戸には何か悪いものが閉じこめてあるんだ。そう、たとえば、牛の頭をした悪魔とか。そいつは、井戸の蓋を開けたとたんに飛び出してきて、風美たちをバリバリと頭から食^くべしてしまうにちがいない。それとも、アラジンの魔法のランプの精^{せい}みに、むくむくと大きくなって、夜空へのぼっていくんだらうか。公民館を覆^{おほ}うほど大きくなった牛頭の悪魔が、風美たちを見下ろしてワッハッハと笑うさまが目に見えるようだった。

(柏谷 知世「ひなのころ」より)

問1 傍線部a～cに関して、以下の問いに答えなさい。

(1) 傍線部a「水に流せた」の慣用的意味として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 不安をすっかり乗り越えられた イ 過ちを相手に認めさせた
ウ 問題をなかつたことにできた エ 謝罪を受けて仲直りできた

(2) 傍線部b「図星」の意味として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 急所 イ 難所 ウ 短所 エ 適所

(3) 傍線部c「せせら笑った」の意味として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 高らかに笑った イ ごまかして笑った
ウ かすかに笑った エ 小ばかにして笑った

問7 傍線部⑤「やれやれ、これで一仕事すんだ」という表現から、風美のどのような気持ちが読みとれますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア おてんの祭りで社にお参りするのには、友達との付き合い上、仕方ないと思^{おも}っている。
イ おてんの祭りで社にお参りするのには、面倒ではあるが当然のことだと感じている。
ウ おてんの祭りで社にお参することに、心の底から大きなご利益を期待している。
エ おてんの祭りで社にお参することは単なる儀式であり、無意味に感じている。

問8 傍線部⑥「だったら、もらっちゃおっかな」とありますが、この表現に込められた藤崎さんの気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 悪ふざけをしたり、気がねなくからかったりできる優子と風美の結びつきを心からうらやましく思っている。
イ 風美と親友になりたいと思わせる発言をして、自分の悪口を言っている優子をさりげなく攻撃しようとしている。
ウ 風美と優子の関係が見かけほど良くないのであれば、風美と親友になれるチャンスだと思っている。
エ 優子にきつい発言をされても言い返せない風美を気の毒に思い、氣遣い^{きでい}を示そうとしている。

問2 傍線部①「優子の目を盗んで」とありますが、風美がそのような行動をとったのはなぜですか。次の空欄に入る適切な表現を、本文中から十字以上十五字以内で抜き出し、答えなさい。(句読点は一字と数えます。以下の問いも同様です。)

風美は優子から られていたから。

問3 次の文は傍線部②「去年の仕打ちを思えば、今年はわたしが藤崎さんと約束したってかまやしない」という風美の気持ちを具体的に説明したものです。空欄A・Bに入る適切な表現を本文中から指定の字数でそれぞれ抜き出し、答えなさい。

去年のお祭りの日、優子は「A(九字)」て、しかも、そのことを「B(二字)」もしなかったのだから、藤崎さんと約束するくらいのことには許されるだろうという風美の気持ちを表している。

問4 傍線部③「風美の胸はさらに波立った」とありますが、このときの風美の気持ちとして適切なものを、次から全て選び、記号で答えなさい。

- ア 落胆 イ 軽蔑^{けいべつ} ウ 不安 エ 期待 オ 動揺^{ようぶ}

問5 傍線部④「仲良さげな二人の様子に、面白くない気分を味わった」とありますが、どうして風美は「ほっとしながらも面白くない気分」になったのですか。その理由を分かりやすく説明しなさい。

問6 空欄部Aに入る表現として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア わたしが優子を選^{えら}んでいるのを、知^しってたんじゃないかったの？
イ わたしと二人だけという約束を、忘れちゃったわけ？
ウ 今日^{けふ}はわたしと約束したんで、優子と約束したんじゃないのに。
エ いつもの藤崎さんの優しさは、どこへ行^いってしまったの。

問9 傍線部⑦「だが、優子は、わざとのように話をそらした」とありますが、このときの優子の気持ちとして、当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どんなに「腐れ縁」と言っても、いざとなると藤崎さんに風美をとられたくないと思^{おも}っている。
イ 風美と藤崎さんが親密になると、自分がのけ者にされてしまうのではないかと思^{おも}っている。
ウ 自分に同調してくれると思^{おも}った藤崎さんから、意外な返事が返ってきたので、話を切り上げたいと思^{おも}っている。
エ 藤崎さんが、風美と自分とが仲良しだと勘違いしていることが本意で、その誤解を解こうとしない風美を許せないと思^{おも}っている。

問10 次の文は傍線部⑧「駄目だよ」／風美は自分の大声に驚いた」ときの風美の心情を説明したものです。次の空欄X・Yに入る適切な表現を答え、文を完成させなさい。ただし、空欄Xには本文中から二十字で抜き出し、Yには適切なものをア～エから選び、記号で答えなさい。

- 風美は「X」ということを、自分でも無意識のうちに感じとっているが、それは風美が「Y」を持っていることの表れと言える。
ア おばあちゃんの教えを信じ、守ろうとする素直さ。
イ 想像力が豊かで、様々な物語を思い浮かべる力。
ウ 人並み外れて怖がりで、何事にも慎重な性質。
エ 目に見えないものを信じ、それをおそれ敬^やう心。

問11 次の各文について、本文の内容に合うものにはAを、合わないものにはBを、それぞれ記しなさい。

ア 作者は風美の心情に寄りそって物語を描いているため、読者は自然と風美に気持ちを重ねながら読み進められるようになっている。

イ 地方の風俗や民間信仰と結びつく人々の姿を背景として、小学生の女の子の姿を生き生きと描いている。

ウ 夏祭りという非日常的な空間で普段の人間関係から離れ、三人の少女が成長していく様子を細やかに表現している。

エ 読者の想像力を駆り立てるような比喩表現が効果的に用いられており、作品に幻想的な雰囲気を与えている。

オ 会話のやりとりからは三人の少女の個性が、会話以外の文からは客観的な事実が読み取れるように構成されている。

国語 解答用紙

得 点

✖	✖	✖	✖	✖
---	---	---	---	---

問 7	問 6	問 4	問 3	問 2	問 1
A	X		A		
ク ワ ダ					
(て)			B		
B					
著	Y				
(しい)					
C	①				
潤					
		思 い	C		
(い)	②	問 5			
D					
陥	③				
(って)					

[illegible]

✖	✖	✖	✖	✖	✖	✖	✖
---	---	---	---	---	---	---	---

[illegible]